

巻頭言「創価大学のグローバル人材育成」	
グローバル教育推進センター副センター長・国際教養学部副学部長 小出 稔 ……1	
〔共通科目〕 共通科目における大幅なカリキュラムの改編 ……2	
〔GCP〕 GCP1期生が社会へ翔く ……3	
〔CETL〕 FDセミナー報告、他 ……4	
〔WLC〕 グローバル・レクチャー・シリーズの報告、他 ……5	
〔SPACE〕 SPACEをとことん利用するための「教員のための」Tips! ……6	
〔グローバル教育推進センター〕 平成25年度におけるグローバル化の取組 ……7	
第12回FDフォーラムのお知らせ ……8	
学士課程教育機構（SEED）の新任教員紹介 ……8	

## 創価大学のグローバル人材育成

グローバル教育推進センター副センター長・国際教養学部副学部長 小出 稔

**創** 価大学は現在、48か国・地域の149大学と交流し、毎年300名を超える留学生がキャンパスで学び、さらに800名を超える学生が海外留学をするという、国際性あふれる大学となっています。2012年には文科省の「グローバル人材育成推進事業」（以下、GGJ事業）にも採択され、全国42拠点大学の1つとして、様々なグローバル化の取組を進めています。本稿では、本学の国際化の中核的取組である経済学部のIP(International Program)、学部横断プログラムのGCP(Global Citizenship Program)、並びに本年4月に開設された国際教養学部を紹介します。

**本** 学の経済学部は、2001年に英語で経済学を学ぶIPをスタートさせました。IPは学部の1・2年次に集中して経済学の基礎を英語で学ぶプログラムです。このIPの画期的な点は、経済学を専門にする教員と英語の授業を担当する教員が協働し、基礎的レベルの経済学を基礎的レベルの英語で学ぶ授業から始めて、徐々に専門性と英語のレベルを高めていくカリキュラムを作ったことです。IPは多くの授業外学習を求め、2年間の学習時間は1,000時間を超えます。その結果、多くのIP履修者が、入学時には想像もできなかった英語力を2年間で培い、3・4年次には交換留学生として海外の一流大学で学んだり、世界から創大に集った留学生とともにJASプログラム（Japan-Asia Studies、日本とアジアの経済・社会問題等を英語で学ぶ経済学部3・4年次の専門科目群）を履修したりしています。

**現** 在、日本の多くの大学で、英語による授業が導入されていますが、日本語で実施していた授業を単に英語に変えるだけでは、多くの学生が授業についていけません。IPの取組は、まさに学生主体の創価大学ならではの発想で、大きな教育効果を挙げることに成功しました。2012年に採択されたGGJ事業では、この経済学部の取組を先行的モデルとして、全学部の専門課程で英語により専門科目を学ぶ科目群の導入を進めており、今年度は全学で約200の授業が英語で実施されています。

**G** CPlは、グローバル・リーダーとして世界を舞台に活躍したい学生のための学部横断型プログラムとして2010年に開始されました。入試の成績等で入学時に選抜された約30名の学生を対象に、1・2年次は所属学部での授業に加

えて、週4回の英語の授業を行い、徹底的に英語力を鍛えます。1年次終了時には、海外研修（参加費用は奨学金として給付）の機会も設けられています。GCPの学生は、2年次終了時までに9割がTOEIC800またはTOEFL550以上を達成し、8割以上が3・4年次に交換留学生として選抜されています。さらにGCPでは、論理的分析力、問題解決力、数理能力を磨く少人数制のゼミも4年間にわたり提供しています。本年3月にGCPは初の卒業生を輩出し、その進路においても、国家・地方公務員、外資系を含むグローバル企業、国内外の大学院進学など、大きな成果を収めました。

**本** 年4月に開設された国際教養学部は、本学の長年にわたる国際交流の経験と国際化の努力の集大成とも言える学部であり、グローバル化がもたらす予測困難な時代を創造的に切り拓き、社会の平和と持続可能な繁栄を実現する人材の養成を目的として掲げています。ハーバード大学を卒業し、米国・デンバー大学で長年理事を務めたマリア・グアハルド学部長の下、世界の一流大学で研究・教育に携わってきた外国人教員11名を揃え、海外大学院での博士号取得者を中心とした日本人教員6名と共に、本格的なリベラル・アーツ（教養）教育を英語で行います。

**同** 学部の開設に当たっては、既に同様のプログラムを展開している日本の他大学からも積極的に学び、学部入学生全員が1年次の後期から1年間留学するという、他に例を見ない厳しいハードルも設けました。留学から帰国後は、「歴史・文化」、「政治・国際関係」、「経済・経営」の三分野を幅広く学び、さらに英語で作成する卒業研究論文を通じて専門性を深める予定です。本年4月に入学した84名の学部第一期生が、現在、後期からの留学を目指して、英語力と異文化理解力を磨いています。

**本** 学は先に採択されたGGJ事業の計画に基づき、2016年には外国語力スタンダード（TOEIC730レベル以上）達成者480名、海外留学生1,000名を目指しています。さらに、2020年の創立50周年に向けて、世界市民を陸続と輩出する「人間教育の世界的拠点」を目指し、国際化を通じた大学改革を徹底させていきたいと思っております。



新設された国際教養学部の学生とスタッフ

## 共通科目における大幅なカリキュラムの改編

■本年度、創価コアプログラムにおける卒業要件が変更されるなど、本学の学士課程教育の基礎を担う「共通科目」において大幅なカリキュラム改編が行われました。具体的には、本学の教育理念等を学ぶ「人間教育論」などの8つの「大学科目」のうちから、卒業までに最低4単位を修得することになりました（工学部生命情報工学科・環境共生工学科・看護学部は2単位のまま）。また、大学での教育を通して培うことが求められる批判的・論理的思考力は幅広い知識が基本となるという認識から、社会科学系・人文科学系・自然科学系の学問分野のうち、所属学部の学問分野以外の2分野から各学部専門科目ならびに共通科目の別を問わず、各8単位計16単位の単位修得を求めていましたが、さらにそのうちの半分、すなわち、各4単位を共通科目から修得することになりました（ただし、卒業要件の異なる看護学部は各4単位計8単位をすべて共通科目からの修得、工学部生命情報工学科・環境共生工学科は変更なしとなります）。半分を共通科目から履修することの意図は、教養として学ぶべき水準をそろえていくことにあります。

■さらに、日本語ライティング能力の養成を目指す「学術文章作法Ⅰ」がいよいよ全学必修化されました（国際教養学部のみ選択科目）。また、文系学生の数理能力向上のための理数系科目の増設・拡充をはかってきましたが、本年度からは100名まで受講できる統計学Ⅰを前・後期に1コマずつ開講し、これまで力を入れてきた外国語力に加え、国語力、数理能力等の学生の基本的スキルを鍛える科目も充実しました（本ページの後半で「学術文章作法Ⅰ」を紹介します）。さらに開設されている科目の特性・レベル・学修の順序性を明確にするために、学部専門科目とも連携して体系的な「科目ナンバリング」を導入しました。

■これまで共通科目では、シラバスの充実に焦点を当てて「ラーニング・アウトカムズ」を設定し、昨年度からはその測定による点検評価（エビデンスの蓄積）の推奨をしています（3年以内に担当教員が自己評価報告書を提出することになっています）。また、到達目標に関するシラバス表記に関してすべての担当者間で協議が進められ、学生目線のシラバスの一層の充実が進んでいます。

## 「学術文章作法Ⅰ」の紹介

学士課程教育機構講師 山下由美子

■2003年度より、学術的な文章の書き方を学ぶ科目として開講してきた「文章表現法」が、今年度より新入生を対象に必修化され（一部除く）、科目名も「学術文章作法Ⅰ」に刷新されました。学士課程教育機構に所属する教員8名が担当しています。

■前期には法学部・経営学部・工学部・看護学部（文章表現法b）、後期には経済学部・文学部・教育学部の学生がそれぞれ履修します（国際教養学部は3年次の選択科目）。また、実際のクラスは、入学時のプレースメントテストの結果から3段階（下位からa、b、c）にレベル分けされていますが、どのレベルにおいても、身につけるべきスキルがスタンダード化されています。

■そこで、「大学で求められるレポート課題に取り組む際の基礎技能の養成を目指す」ことを共通の教育目標として掲げ、また、ラーニング・アウトカムズ（学習成果）として右表の6点を提示しています。また、共通目標を達成するための基礎的知識（ルール）を学ぶ項目では、すべてのレベルで共通の教材を使用しています。

最終的には、aレベルでは大学1年生レ

ベルの2000字程度の論証型レポートを作成し、その内容についてポスター発表を行います。またbレベルでは2400字程度、cレベルでは3500字程度のレポートを作成します。評価については、担当者による評価基準のばらつきが最小限に抑えられるように、レベルごとに作成した「ルーブリック」を用います。また、週1回定期的に担当者ミーティングを開き、進捗の確認や評価基準のすり合わせなど、教員間での意思の疎通をこまめに行っています。

■レベルごとに授業の進め方や最終レポートの型や分量は異なりますが、どのレベルを履修しても、学期終了時には基礎的なレポート作成を手順に従いながら自律的に行い、また様々な科目のレポート課題にも応用していける力がつけられるよう指導しています。



学術文章作法Ⅰの担当教員

- ①レポートに必要な情報を文献から読み取ることができる。
- ②レポート作成の手順を理解し、手順通りに作業を進めることができる。
- ③レポートに適した文章表現ができる。
- ④レポートの基本的ルールを理解し、守ることができる。
- ⑤パラグラフライティングを意識し、読み手に明確に伝わるレポートを書くことができる。
- ⑥推敲する習慣を身につけ、実行することができる。

## GCP第2期の挑戦

GCPプログラムコーディネーター 佐々木 諭 (看護学部准教授)

2010年に開設したグローバル・シティズンシップ・プログラム（以下GCP）は、2014年3月に1期生が卒業を迎えました。3月に卒業した1期生は、おもに大学院進学、公務員試験を目指した17名の学生となり、他の1期生は1年間の留学を経て2015年3月の卒業を予定しています。1期生として選抜された32名全員が、一人ももれずに無事GCPを修了する見込みです。

卒業した1期生17名は、名門大学院進学4名、難関公務員試験合格3名、国内大学院進学10名という見事な進路の成果を勝ち取りました。

工学部卒業の菅原将さんは、ジョーンズ・ホプキンス大学大学院免疫学専攻に合格しました。ジョーンズ・ホプキンス大学大学院は、医学系分野においては、ハーバード大学と並ぶ世界最高峰の大学院と評されています。将来は、免疫学の研究者となり、難病の薬剤開発に貢献することを目指しています。

法学部卒業の田村聡美さんは、核軍縮研究の実績を誇る米国モンロー大学大学院に合格しました。田村さんが核軍縮と核兵器撤廃に強い関心を持つきっかけとなったのが、GCP生として2010年と2012年に参加した「ノーベル平和賞受賞者世界サミット」でした。ノーベル平和賞受賞者の、平和を希求する強い熱意と必ず平和を実現できるとの確信に触れたときに、かねてから持っていた平和のために貢献したいとの思いが確固たる信念へと変わりました。その後も、積極的に日本代表として国際会議等に参加し、経験を積み重ね、専門性を磨き、今回の大学院合格を勝ち取りました。大学院進学までの期間は、在学時代に経験した外務省のインターンシップの経験をいかし、現在契約職員として外務省の核軍縮課に勤務しています。

難関公務員試験には、外務省専門職に1名、横浜市役所に2名が合格しました。また、国内大学院には、東京大学、京都大学、大阪大学と創価大学大学院に進学を果たしました。1年間の留学を経験した1期生は来春に卒業を控え、就職においてもこれまでに顕著な成果を示しています。学部卒業としては初となる外資系コンサルタント戦略本部の内定をはじめとし、外資系最大手の投資銀行やコンサルタント、IT企業等、また、邦人企業においても、日本最大手の都市銀行の総合職、日本を代表する自動車メーカー等への就職が決まっています。

1期生の見事な成果を振り返り、その成功の要因を考えたとき、三つの主要な取り組みが挙げられます。第一に、徹底した英語教育です。コミュニケーションツールとしての英語力の習得を目指し、2年次終了までの集中プログラムにおい

て英語力を鍛え、約8割の学生がTOEIC800点以上を取得し、4年次終了までに約半数が900点に達しました。

第二には、専門性と学際性の学修があげられます。GCPは、学部横断型であり全学生がそれぞれの学部所属し、学部の専門分野の修得に努めています。大学院進学や就職においても、研鑽した専門性を十分に生かしたことが、各自の目標を達成することにつながったと考えられます。また、GCPはアカデミックスキルと数理能力を磨くための独自の授業を提供しており、そこでは、論理的思考力、批判的考察力、問題解決能力、統計処理能力など基礎から高度な応用スキルまで修得することを目指しています。学生同士がそれぞれの専門性に根ざした意見を出し合い、議論することにより、広い学際的な思考や考察力を養うことができています。

第三には、キャリアサポートと学外経験の推奨です。1年次よりキャリア授業を提供し、単に進路のためのキャリアアPLANにとどまるのではなく、何のために学ぶのか、どのように地球市民として社会に貢献するのかを省察する機会を与えています。大学卒業後も見据えた長期的なキャリアアPLANに基づき、特に3年次以降は、そのための力を磨く学外活動に積極的に挑戦しています。GCP生は、高いレベルで競い合い、学びあうことを常に目指しています。

GCP学生の2年終了時までの授業外学習時間は、1日平均5～6時間となっており、習慣化した学習は、3年次以降も自律した学習者としての継続した学びにつながっています。GCP生の継続的な努力が、学内外において見事な成果となって現れていることは担当教員全員の喜びです。今年5期生が入学し、GCPの新たな挑戦が始まりました。これからも1期生を超える学生を育成するために励んでいく所存です。



第1回GCP修了式

## 2013年度FDセミナー（後期）

### ◆2013年度第4回学士課程FDセミナー

10月4日、学校法人河合塾の谷口哲也 教育研究部長を講師に迎え、「なぜ河合塾はアクティブラーニングにこだわるのか」をテーマに第4回FDセミナーを行いました。学習の形態を重視してきた従来のアクティブラーニングから学習の質を重視する新しいアクティブラーニングへの再設計に関する提案や、教員同士の協働と学生同士の協働との相互作用による学びの質保証等、アクティブラーニングに関する調査・評価・提言について、多岐にわたり講演して頂きました。学内外の教職員・学生等、40名を超える方が参加し、参加者からは「初年次で『学びの構え』を大学側が意識して学生に働きかける重要性が理解できた（教員）」等の声が寄せられました。なお、今回のセミナーは、オープンしたばかりのラーニング・コモンズでの初めてのFDセミナーとなりました。



### ◆2013年度第5回学士課程FDセミナー

11月8日、山形大学基盤教育院／教育開発連携支援センターの杉原真晃 准教授を講師に迎え、「アクティブラーニングと学習共同体」をテーマに、それらの定義、背景、目的等について、実際の取り組みを通じた成果や課題を交えて講演して頂きました。

参加された約40名の学内外の教職員・学生からは、「地域での学習共同体という発想や実践が新鮮で、取り入れたいと強く思った」、「学生の自発性を高めるためには、教員の教育力、とりわけ学生を見る目や観察力を高めることが重要であると学んだ」、「アクティブラーニングといっても、やはり『何のため』かが問われる。その一つの答えとして、地域と結びついた学習共同体という発想と実践は素晴らしいと感じた」等の声が寄せられました。



### ◆2013年度第6回学士課程FDセミナー



2月13日、愛媛大学 総合情報メディアセンター教育デザイン室長／教育・学生支援機構教育企画室の仲道雅輝 講師を迎え、「学生の授業時間外学習を促すシラバス作成法」をテーマに、シラバス作成のワークショップを実施しました。約20名の学内外教職員の参加者からは、「自分のシラバスを本気で見直す必要を感じた。仲道先生が親切に質問に答えてくださり、セミナーに積極的に参加できた」、「講義における学生の学びの中で、シラバスがどのように位置づけられるべきかを改めて考え直す機会になった」等の声が寄せられました。

### 2013年度後期CETLセンター員勉強会を開催

1月20日に第1回CETLセンター員勉強会「高等教育の質保証」（担当 富岡比呂子、当時 創価教育学研究所、現教育学部准教授）が開催され、大学評価・学位授与機構が提示した「教育の内部質保証システム構築に関するガイドライン」をもとに質保証が高等教育における課題となってきた経緯について中央教育審議会の答申をふまえて確認し、現代の日本の高等教育が置かれている状況について理解を深めました。

また、3月10日に第2回CETLセンター員勉強会「大学における内部質保証システム構築と教学IR」（担当 清水強志 SEED准教授）が開催され、第1回に引き続き、近年の高等教育における質保証について理解を深めました。

### 2014年度 第1回CETLセンター員を開催

4月23日、2014年度第1回CETLセンター員会が開催され、新メンバーの紹介を兼ねた学長との懇談会が行われました（本年度のセンター員は下記の通りです）。



#### <2014年度CETLセンター員>

センター長 関田 一彦（教育学部）

碓井 健寛（経済学部）

中村 みゆき（経営学部）

本田 優子（看護学部）

山下 由美子（SEED）

小山 貴之（SEED）

近貞 美津子（経済学部）

中野 良吾（教育学部）

佐藤 美香（看護学部）

齊藤 幸一（SEED）

副センター長 望月 雅光（経営学部）

上田 宏和（法学部）

富岡 比呂子（教育学部）

三津村 正和（教職大学院）

畑 由美子（SEED）

渋谷 明子（文学部）

井田 旬一（工学部）

山崎 めぐみ（SEED）

嶋田 みのり（SEED）

寒河江 光徳（文学部）

川井 秀樹（工学部）

清水 強志（SEED）

大島 光（SEED）

## WLC主催 2013年度グローバル・レクチャー・シリーズの報告



2013年11月13日（水）、WLC主催のグローバル・レクチャー・シリーズに石田光氏を迎え、講演していただきました。石田氏はカルフォルニア大学を卒業し、現在はご自身が2006年に

創設した株式会社夢道s（コメチス）の代表取締役として活躍されています。夢道sは日本にいる留学生の就職を支援するための会社で、これまでに、(株)三菱東京UFJ銀行、(株)東芝、(株)JTB、ドイツ銀行などの会社に600名以上の留学生を紹介して就職に導きました。この功績が称えられ、経済産業省より「ダイバーシティ促進事業表彰」、また、東京都より「経営革新優秀賞」を受賞されています。

講演で石田氏は、壁にぶつかった時こそ問題を可能性ととらえ、乗り越えていくこと、また夢を実現させるためには目標に集中することが大切だと訴えられました。冒頭では、海外から見ると、近年の日本の経済状態が大きく変化していること、ま

た人生の長さを年数ではなく、時間に計算すると人生がいかに短いかということをお話されました。さらにアメリカ留学中に大きな影響を受けた一人の教師との出会いについて触れられ、その教師から「枠の外で考えること」と「変化には、小さい単位での変化とパラダイムシフトでの大きな変化の2つがあること」を学び、そしてその結果「卒業後にはパラダイムシフトを開始したい」と決意して帰国したことを話されました。

次に、見慣れているものを新しい方向から見ることの重要性を指摘され、問題を違う観点から見ることで解決方法を見出すことができた例を1つ紹介されました。現在、高齢化に伴い年配者の一人暮らしが増えており、一方、留学生は住居を探すのが非常に困難です。そこで、この2つの問題を融合させ、一人暮らしをしている高齢者の家に留学生をホームステイさせることで2つの問題を同時に解決できた、と。そして、同様のアプローチによって、日本にいる「難民」が抱える諸問題も解決できないか、現在模索されているとのことでした。

最後に、問題にはさまざまな相互関係があることに気づくことが大切であり、時間は限られていることから、一人ひとりが解決したい問題を選び、取り組んでいかなければならないと強調して、講演を結ばれました。

## 英語による講義の実践方法 プロフェッショナル・ディベロップメント セミナー

創価大学は、日本および全世界から集まった学生を「世界市民」へと育成する指導的役割を担う拠点となるべく、先進的な試みを続け、H26年度からは全学部において英語による専門科目の講義が始まります。しかし、教員はそれぞれの専門分野におけるエキスパートである一方、英語を使用した講義では、それが教員の母国語でない場合には、特有の問題が生じるケースも見られます。

そこで、長年にわたって、実践に即した教育方法に基づき緻密に計画された英語カリキュラムを提供してきたWLCが、各学部で新たに開設される英語科目の一層の充実・強化に役立ててもらうために、昨年11月6日に「プロフェッショナル・ディベロップメント・セミナー」を開催し、「学生主体の教育法に基づくアプローチを成功させるためのストラテジー」の紹介を行いました（講師はラリー・マクドナルド、マルコム・ダガティー、ヴァレリー・ハンスフォードの3名）。

ラリー・マクドナルドは、新たな洗練されたリーディング法へと学生を導き、熟達させることを目的とした「足場かけ（scaffolding）」の効用、つまり、難解な学術英語の読解を進めていく際にガイドの役割を果たすような質問をすることで、非常に困難なチャレンジであっても、学生の不安を和らげつつ、読解を続けさせることが出来ると紹介しました。

次いで、マルコム・ダガティーは、学生が自分で読んだテキストをより活用させるのに役立つ「ジャーナル・ライティング」を用いたアプローチを紹介しました。これは学生を知識を受け取るだけの受動的読者にせず、彼らの知識に対する反応をさまざまに使用するアプローチです。ジャーナルは学生に講義で使用するテキストと対話することを促し、かつ読んだテキストを参照しながら自分自身の見解をまとめ上げていくことを可能に



セミナーで実践例を紹介する3名の講師

します。

最後に、ヴァレリー・ハンスフォードは、ライティングやリーディングだけではなく、基本的な会話方法にも構造化が必要であることを指摘しました。それは学生の英語による会話力を深化・定着させ、考えなくても英語のフレーズが自然に出てくるような会話力を身につけさせるのに役立ちます。学生に「アクティブリスニング・フレーズ」を提供することで、会話をよりナチュラルなものにし、英語における会話の流暢さをさらに発達させるよう導くことができます。

21世紀は真の世界市民教育のため、有意義で洗練されたカリキュラムを提供することがますます求められていますが、そうした中、このように学内で教育に携わっている教員が、それぞれの専門知識やストラテジーを共有することは、これからも創価大学が学生のための教育の最先端であり続けることを保証していくと確信しています。



## こんな学生いませんか？

SPACEでは、学生のさまざまなニーズに合わせた学習支援を提供しています。是非ご利用ください。

# SPACEをとことん利用

### 学習相談・学習セミナー

(ポータルから申し込むかヘルプデスクで申し込みます)

現在	可能性	リソース
なんでこんな時間の使い方をするんだろう？	ちょっと手助けをしてもらえばできるようになる	学習相談 時間管理セミナー
目標は決めるんだけど、最後までやりきれないな～。	現実的な目標が設定できればいいのに	長続きする目標設定セミナー
徹夜して課題を読んでいるのに、理解できていない	もっと効率よく読めればいいのに・・・	ひたすら鍛える読解力セミナーⅠ, Ⅱ, Ⅲ
一生懸命レポートを書いているのに、何かが違う	レポートのルールや、考え方が解ればできるかも	大学でのレポートの書き方、引用の仕方、読みやすい文章セミナー
LTD予習ノートをやっけてこない、または的を外している	1回の説明では理解できなかったのかも。もう1回説明を聞けばできるかも	読書ノートの作り方セミナー
パワポのデザインは凝っているんだけど OR パワポのできは良いのだけれど、何を言っているか解らない	発表資料とは何か解れば大丈夫 OR 発表の練習をすれば上達する	プレゼンテーションセミナーⅠ, Ⅱ, Ⅲ, Ⅳ
ノートを全くとっていない OR ノートはとっているのだけれど十分でないし整理できていない	今までのノートのとりかたが合わないのかも	マインドマップの描き方セミナー Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ, Ⅳ, Ⅴ



グローバル人材育成プログラムなども始まり、各学部において英語で教えられている教員の方々が増えました。英語で授業を進めようとしても、学生の英語の能力によって授業で扱える内容も異なります。英語やその他の語学に学生が触れる機会を増やすことができます。

### WLC

(ポータルから予約します)

現在	可能性	リソース
基本的な会話がまだできない	場慣れをすれば、話すことへの抵抗感は減るかも	英語Chit Chat Club (初級) その他 Global Village
授業で英語のディスカッションが成立しない	自分の意見を持ち、発信することに慣れれば...	English Forum (中・上級)
提出されたレポートの課題を理解できない	誰かに見てもらい、推敲してから提出すれば良い物ができるのに...	Writing Center
TOEFLの点数がなかなか上がらない	スピーキングがネックかも OR そもそも勉強の仕方がわからないのかも	iBT Speaking Center OR English Consultation Room (ECR)

## 教員のための

# するためのTips!

### チュータリング

(ポータルから申し込みます)

現在	可能性	リソース
数学の基礎がわかっていない	解らないところを克服すればできるのに…	数学チュータリング
レポートが書き出せない	考えていることを明確にできるよう、質問してもらえれば始められるのに…	レポートチュータリング

### オアシス・プログラム

(space-support@soka.ac.jpから)

このような学生がいたら是非勧めてみてください。

- ⇒ GPAがいつもぎりぎり、2.1～2.3を行ったり来たりしている。
- ⇒ 中学・高校からの学習習慣が身についておらず、やる気が空回りしている。
- ⇒ 学期のGPAが2.0に満たなかった



セミナーは  
まだまだあります

■SPACEの利用に関するご質問・お問い合わせは内線6720までお願いいたします。

グローバル教育推進センター

<http://global.soka.ac.jp/>

## 平成25年度におけるグローバル化の取組

■平成24年度の文部科学省補助金事業「グローバル人材育成推進事業（特色型）」(平成26年度より「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」に改称)に採択され、3年目に入りました。ここで平成25年度の大学のグローバル化の取組みとその成果について簡潔に報告します。

■平成25年度の取組みとして、とりわけ、海外修学体験の機会拡充に力を入れました。事業申請時の交流大学数は48か国・地域、135大学でしたが、新たに14大学との学術協定が結ばれ、48か国・地域、149大学(平成26年6月現在)に拡充されました。また、すでに実績を積み重ねてきている経済学部の専門科目を英語で学習するInternational Program (IP) を6学部(経済・経営・法・文・教育・工)に展開し、国際対応力を磨くとともに専門性を高めるためのカリキュラムの充実を図りました。さらに、学部ごとに授業とリンクした海外短期研修を全7学部で実施し、その結果、海外修学体験者数は868名に増えました。また、平成25年度に新たに外国語学力スタンダード(TOEIC730点相当以上)を達成した学生は269名(平成24年度222名)に増

えました。

■今後も一層の学習環境の整備に取り組み、平成28年の目標、年間海外修学体験者1,000名、外国語学力スタンダード達成者480名の実現を目指して全力で取り組んでまいります。

平成25年度海外修学体験者および外国語学力スタンダード達成者数

	海外修学体験者 (留学等)	外国語学力 スタンダード達成者
経済学部	220	92
経営学部	104	22
法学部	136	51
文学部	224	70
教育学部	90	20
工学部	63	13
看護学部	31	1
	868	269

## 第11回創価大学FDフォーラム（2013年度）を開催

2013年12月15日（土）、本学中央教育棟AB102教室にて「第11回創価大学FDフォーラム」を開催しました。今回のFDフォーラムは「アクティブ・ラーニングと大学教育」をテーマに開催し、学内外より、大学教職員、学生等、100名を超える方が参加されました。

第1部 アクティブ・ラーニングを支援する本学の取り組みとして、西浦昭雄総合学習支援センター長より、同年9月にオープンした本学のラーニング・commons「SPACE」の設立経緯について報告があり、次いで山崎めぐみ同副センター長より、実際にボランティアスタッフとして活動に参加している学生とともに具体的な活動について報告しました。

第2部では、関西国際大学の濱名篤学長を講師に迎え、「主体的な学びのための授業マネジメントの構築」と題した基調講演を行って頂きました。近年の



第1部で報告する山崎先生と学生たち

中央教育審議会答申の内容を踏まえ、関西国際大学におけるHIP（High-Impact Practices）による教育方法、独自のルーブリックや到達テストによる学修成果の測定などの取り組みについてご紹介頂き、学士課程教育の質保証を実現する仕組みを確立するために組織的協同や体系的授業マネジメントを確立していくことが重要と語られました（講演の詳細は本学学士課程教育機構の年報 *The Journal of Learner-Centered Higher Education* (第3号)に掲載)。

参加者からは「基調講演では、現在の大学の現状、問題点、これから向かうべき方向性が大変よくわかった。自分の学科、科目へフィードバックしていきたい」「SPACEの取り組みは大変興味



第2部で講演される濱名先生

深かった」「SPACEの見学会では、施設も素晴らしかったが、ボランティアスタッフと教員スタッフの対応がさらに素晴らしかった」などの声が寄せられました。

## 第12回創価大学FDフォーラムのお知らせ 7月26日（土）

本年度のFDフォーラムは、7月26日（土）13:00より、「エビデンスに基づく教育改善」のテーマで、創価大学大教室棟S201教室において開催致します（開催に先立ち、午前中にSPACE見学会あり）。

参加をご希望の方は、学士課程教育機構（seed@soka.ac.jp）宛にご連絡下さい。学外の方もぜひご参加下さい。

基調講演①：「今求められる大学評価とFD」 秋山 卓也氏（文部科学省高等教育政策室 室長補佐、大学評価専門官）

基調講演②：「新しい授業改善の試み」 秦 敬治氏（愛媛大学 教授）

本学の教育改善の事例報告

### ◇本年度のFDセミナーのお知らせ

日程	講師	演題
第1回 4月25日（金）終了	沖 清豪氏（早稲田大学）	私立大学におけるIR：学生支援との関係に注目して
第2回 5月16日（金）終了	喜久里 要氏（大阪大学）	Road To XX in Higher Education ～大局的な視座と緻密な学問を介した雄飛
第3回 7月 4日（金）終了	経済学部・法学部・経営学部	新カリキュラムの工夫1
第4回 9月11日（木）	伊藤 健二氏（慶応義塾大学）	卒業生調査から見た教育改善
第5回 10月24日（金）	溝上 慎一氏（京都大学）	深い学びのための授業づくり
第6回 12月 5日（金）	文学部・教育学部・工学部	新カリキュラムの工夫2

学外の方も参加可能です。参加をご希望の方は、学士課程教育機構（seed@soka.ac.jp）宛にご連絡下さい。

### 学士課程教育機構（SEED）の新任教員紹介

#### ■ワールドランゲージセンター（WLC）

講師 ジリアン・ベルトン・サイトウ

講師 リーアン・アンダーソン

助教 富田 浩起

講師 スティーブン・モーガン

助教 佐野 真歩

講師 高江洲 朝子

助教 井上 咲希

#### ■教育・学習支援センター／総合学習支援センター

助教 小山 貴之



創価大学

創価大学学士課程教育機構ニュースレター [SEED] 第7号

発行日 2014年7月17日

発行者 創価大学学士課程教育機構

〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236

http://seed.soka.ac.jp/